生徒指導の初期対応

不登校に前ぶれはあるのか？

昨年、不登校率が過去最高になりました。残念ながら、現状では不登校の数が大幅に減る要素はありません。しかし、学校や学びの多様化を通じて、次代の教育への展望が開けていく可能性があります。不登校支援からそれが見えてくるのです。

「あいあいネットワーク of HRS」代表
深美 隆司

ふかみ・たかし
大阪府松原市で32年間中学校教員を務める。2011年に退職し「あいあいネットワーク of HRS」(http://www.aiainet-hrs.jp/)を立ち上げ、教員研修、授業コーディネーション、市民講座、不登校の保護者への支援などに取り組んでいる。

不登校数・率の推移

昨年10月、2016年調査において、小中学校の不登校率が過去最高（1・35％）に達したことが報道されました。人数にして13万4398人、しかも、小学校でははじめて3万人を超え、中学校でもはじめて3％を超えたという結果でした。

不登校の人数は「増えてもいないし、減ってもいない」と論ずる方もおられます。確かに、1998年に12万人を超えてからは、11万台から13万台の間を上下しています。しかし、1991年は約6万7000人だったことを考えると、わずか数年の間に倍に膨れあがり、そこから高止まりしているという大変な状態が、約20年間も続いているということになるのです。

今年発表の数値がどう出るのかはわからないのですが、残念ながら、不登校の数が大幅に減るという要素が見当たりません。というのも、依然と高い数値を示している「子どもの貧困」問題があるからです。その背景にある大人の貧困は虐待やネグレクトにつながり、進む少子化は、親の「愛情」という衣をまとった干渉が子どもの「心への侵入」に結びつきます。そして、それに加えて、子どもから大人まで情報端末をもつ高度情報化の流れが、家庭内の個族化を加速させています。つまり、人間の育ちにとって最も重要な、幼年期から思春期までの十数年間のコミュニケーション環境が大きく破壊されているのです。このことは、不登校になってしまった子どもたちの大半が情報機器依存に陥っていることを見ても明らかです。不登校になっている子どもたちを氷山にたとえると、海面下に

は難しさを抱えた子どもが、その何倍もいるということになります。

そもそも、1998年の12万人と現在の数値を同じテーブルの上で評価することはできません。不登校の子どもを囲む状況がまったく異なっているからです。職業や学びが多様化した現在、学校という形自体が多様化しているのです。行政が運営する教育支援センターなどへの通所は、何年も前から学校に出席したことになっています。また、昨年施行された教育機会確保法は、そんな多様な形の学びに法的な根拠を与えました。この法律では、多くの不登校の子どもたちが通うフリースクールは、学校に通っていることにはならなかったわけですが、実際には数年前から、在籍する学校長の判断があれば出席扱いにすることができるようになっています。地域によっては、私立の通信制高校が運営している中学生対象の昼間の塾と教育委員会が連携して、学校への出席扱いにしているところもあります。大手家庭教師派遣会社も、個別指導の実績を生かして、不登校の子どもたちへの積極的な支援をはじめていますし、とうとう、大手出版社とIT企業が一緒になって、ネットだけの高校（規定のスクーリングは必要）を誕生させてしまいました。中学生・小学生の部ができるのも時間の問題でしょう。このような環境の変化があるにもかかわらず、不登校の子どもの数は大幅には減っていないのです。

依存的なありようから主体的なありようへ

さらに深刻なことは、都市部から進行してきている教師の世代交代です。年齢構成から考えると、世代交代とは大幅な若返りを意味しています。大都市においては、その若返りはほぼ終了しました。その結果、何を生み出したかというと、「子ども」「保護者」「教師」による『依存の三すくみ』です。若い人たちは、まだまだ成長過程の初期の状態ですから、さまざまなスキルが十分には備わっていません。自信がなければ、他者を信じることもできませんし、許すこともできません。私自身も若いころはそうでした。人間は自信と信頼がなければ、他者を操作し、いいなりにしようとします。そして、それが頓挫したときに「人のせい」にすることで自分を納得させるのです。また、他者に問題が振りかかったとき、共感して寄り添うこともできずに、「自業自得・自己責任」などという感情を依存的な人はもってしまいます。そうなれば、子どもはさらにエネルギーを失い、保護者は「クレーマー」や「モンスター」と呼ばれる人になっていくのです。解決しなければならない問題は山積みにされ、それをコントロールできなくなったときに、学校は学校としての体を失っていきます。不登校の子どもの支援に手が回りません。依存的な教師集団の中には、いくつかの仲良しグループが生まれ、一人または複数の教員による教員の支配がはじまります。そうなると、管理職でさえどうすることもできないのです。この集団の依存的支配が、教師、子ども、保護者のそれぞれに発生していきます。このような学校では、見た目は落ち着いた学校だったとしても、不登校は増える一方です。ある大都市の行政区では、不登校が年間100人ずつ増えているともお聞きしました。大変なことです。

これからの時代、学校が学校らしくあるためには、大人も子どもも「依存的なありよう

から主体的なありようへ」と成長していくためのプロセスが必要なのです。新学習指導要領に「主体的・対話的で深い学び」が提起されたことは当然のことだと私は感じています。

不登校に前ぶれはあるのか？

大型連休後のいまの時期に、子どもたちが不登校に入ってしまうケースが多いと言われています。4月から1カ月あまりの緊張した生活自体が引き金となるケースです。もし子どもの状態に「前ぶれ」のようなものを発見できれば、支援も早く行き届くのに……と思っておられることでしょう。しかし、問題はそんな簡単なことではありません。いじめを受けたり、トラブルが起こった後、あるいは続けて休んだりすることを、前ぶれのように感じてしまうのですが、実は、その時点で既に不登校に入ってしまっているのです。もちろん、そんなことがあっても不登校にならない子どももいるわけですから、その違いは何だろう、という話になります。不登校になる場合、引き金（きっかけ・原因と呼ばれるもの）と要因が存在します。要因とは、不登校になってしまうさまざまな要素という意味です。普通、それは長い時間をかけて形成されます。主には、他者からの心への侵入であったり、自分自身が我慢するという自己制御であったり、自分を大きく見せようとするツッパリであったりします。その結果、「内面」と「現れ」に大きな乖離が生まれ、引き金によって「現れ」が未成長の「内面」の位置まで落ち込むのです。不登校になってしまった子どもが駄々をこねたり、試し行為に走ってしまったりするのはこのことが理由です。これは、大人も子どもも関係なく起こります。ひきこもってしまった大人が幼児がえりすることも珍しくはありません。「なぜ学校へ行くのかわからない」「自分が自分でない」「好きなことも、したいこともない」などと不登校の子どもはよく口にしますが、無理もないことです。心が幼児ですから、外に出ることもできません。無理に連れ出そうとすると、強烈なストレス反応に見舞われ、心身に大きな変調をきたしてしまうのです。

それでは、どのように心の状態を知るのかということになります。そこで、役に立つのがアンケート調査です。Q-U（「楽しい学校生活を送るためのアンケート」図書文化社）の学級満足度尺度などがあります。私が中学校の現場にいたときは、学校独自で8年間データ集積を重ねた「学校生活調査」というものを使っていました。その中の自己肯定感調査（自立度や主体性を測るもの）です。

○私は、家ですぐ腹を立てます。
○私の親は、私にたいへん期待しすぎます。
※HP（http://aiainet-hrs.jp/）から全問ダウンロード可

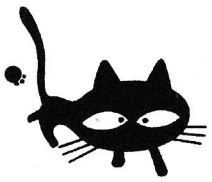
などの25問からなるものですが、「あてはまる、あてはまらない」の選択肢から「あてはまらない」を選べば1点です（逆転項目あり）。中学生であれば、平均13～14点、小学校高学年では少し低く、高校生では少し高くなります。この調査で、8点未満の子どもを要支援と考えていましたが、なおかつその子どもが、「成績が良く」「素直な良い子」である場合は、非常に危険な状態であると判断していました。「内面」と「現れ」が大きく乖離している状態（非常に依存的であるのに、自立

的であるように演じている状態）であるとアセスメントしていたのです。実際、そのうち何人かは不登校になりました。

保護者への支援は……

コミュニケーションについての教員研修や市民講座に取り組んでいると、不登校のことで保護者の方から相談を受けることがあります。一つのケースを紹介すると、ある教育委員会からの依頼で研修をすませた直後に、保護者の方からＳＮＳで相談を受けました。二人の子どもさんがかなり重篤な状況でしたので、すぐに面談をし、保護者への支援を開始しました。その手法は、エンカレッジ（ほめる・勇気づける＝加点方式）とリフレーミング（ネガティブをポジティブに変換する）の二つです。どちらもＳＳＴ（ソーシャルスキルトレーニング）と言われているものです。加点方式に対するものは減点方式なのですが、できている部分に目を向けず、できていない部分を指摘するやり方です。減点方式は、相手のエネルギーと自信を奪います。エンカレッジ（加点方式）は、できている部分を評価し、積み上げと自信回復を目指しているのです。保護者の方とのコミュニケーションは、ＳＮＳや電話を使います。そもそも、保護者の方自身が乖離を起こしているケースが多いので、大人が成長することで、子どもも成長してもらおうということです。リフレーミングでは、日記を書いてもらいます。あるがままに書いてもらうと、不安や心配、恐怖というものがボロボロと出てきます。そんなネガティブな部分に保護者自身がチェックを入れ、ポジティブなものに変換していくのです。決して、私が変換してあげることはありません。私はフィードバックするだけです。それも、アドバイスではなく「わたしメッセージ（わたしの感じ方）」で返していくのです。

はじめは、毎日のメッセージ交換と1週間分の日記（ＳＮＳを使った写真）でしたが、この方の場合、2カ月で決着がつきました。このようなＳＳＴを使えばだいたい3カ月で結果が出ると言われ、医療機関などでも活用されています。つまり、保護者自身の乖離が克服され、「自分が自分であってもいい」という自信と余裕が生まれたということです。子どもさんたちも支援開始前に比べ、かなり自己表現ができるようになりました。いまでは、日記も終了し、2週に1回程度のＳＮＳや電話で支援を続けています。子どもさんたちの「復帰」にはさらに時間がかかるのですが、肝心なことは、依存的だった保護者の方の姿が、主体的な姿に成長してきたということです。主体的な人は、自分自身で問題を解決し、必要とあれば、他者を信頼して援助を受けることができるのです。

「主体的になること」

いまの教育に、最も求められていることです。